

構造家と学者の エース・浜田英明

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■師・佐々木陸朗から学び尽くす

「構造デザインは全人格的でホリスティックなものである」という構造家・佐々木陸朗（本コラム第67回に登場）さんの論に、建築家に対する想いが「ドンピシャだった」と若い表現でいい切るのは、構造家の浜田英明さんだ。出身の名古屋大学は、伊勢湾台風の後には都市防災の拠点として建築学科ができたという元来構造エンジニアリングに力点が置かれていた学校。1990年後半に構造デザインの概念が広まってきたころ、佐々木陸朗さんを迎えた。浜田さんは幸運にも一生の師と出会い「構造デザインについて語り合える素晴らしい環境で学べて光栄でした」という。当時は、どの研究室に入るかを学生同士の話し合いで決めていたという。構造界のアカデミックな系列に詳しい覇志堂が、知らなかったと面白い。

当然、佐々木陸朗構造計画研究所に入所して、退所までの7年間を数々の名建築に携わる。構造担当者としての浜田さんの研究テーマが端的に表れている建物が「豊島美術館」（設計／西沢立衛）。アーティストの内藤礼さんと建築家の西沢立衛さんの感性がモチーフの「水滴」。それをRCシェル構造で現した建築そのものがアート。上部の大きな二つの穴から自然光や外気が入ってきて、私たちを霊妙な感覚に誘います。Rolexラーニングセンター（設計／SANAA）、上海ヒマラヤセンター（設計／磯崎新）などの、海外での大規模な作品にも参加する。建築家と協働する佐々木陸朗さんの姿からは、「総合芸術にまで開眼するのが構造家だ」という意識も培われた。



■法政大学で構造家を育てる

法政大学歴代の構造家の、青木繁先生、川口衛先生、佐々木陸朗先生を継承する法政大学デザイン工学部准教授である。2011年に「構造形態創生法による自由曲面を持つRCシェルの構造設計法の提案」で博士（工学）を取得。構造家が新しく美しい空間をもつ建築を総合的に作り出すデザインエンジニアとしての地位も確立してきた今だから、教育が重要だと感じている。構造実験では学生に、揺らす、乗る、素材に触るなど体感させる。迫力ある装置が身近になくても、それがかえってよい教育になると、逆転の発想で臨む。川口衛先生や阿部優先生が書いた『建築構造のしくみ』（彰国社、2014年）を授業で使い、数式を使わずに概念で構造を理解させるという川口衛先生の遺産を受け継いでいるのだ。

機械と人間、どちらかに偏ると逆が見えなくなるから、コンピュータをうまく使いつつ、両方の視点からみるのがよいだろうと考える。“第7回法政大学の構造デザイン教育をめぐって”で話す専任講師時代と変わらず「結局大事なのは人間」という。「佐々木研究室で構造デザインについて語りあったように素晴らしい環境を法政大学でつくりたい」とも。

衣服の複雑な図面を引いていた繊維の技術者だった父と土木エンジニアになった兄がいて、技術の環境で育ったのが建築への入り口だったという。学校の行き帰りに建築現場で作業している職人を長い時間見て飽きなかったという生来の建築人間なのだ。けれど日々は偏らずに、設計者の妻と愛息育てに勤しむ現代の青年がそこにいる。

建築家の難波和彦さんが「法政大学の構造家は伝統的に日本の構造デザインの最高峰といわれていますから、浜田さんには頑張ってもらいたい」と語れば、「新しいかたちで展開していかれることを期待している」と師の佐々木陸朗さん。構造界のアカデミズムのエースであるのは間違いのないようです。